

# N E W S 未来館

福島県男女共生センター広報誌

2022 SUMMER  
VOL.

# 82



特集 / 復興10年、ふくしまで自分らしく生きることとは

## 特集1 福島県男女共生センター開館20周年記念イベント 「復興10年、ふくしまで自分らしく生きることとは」

令和4年2月13日に、開館20周年を記念して、双葉郡川内村の遠藤雄幸村長とフォトジャーナリストの安田菜津紀さんをお招きし、当センター千葉悦子館長との3名で、男女共同参画等の視点から、福島・東北の復興と福島の未来について大局的に語り合うトークイベントをオンラインにて開催しました。

大変多くの県内外の皆様にご視聴いただき、誠にありがとうございました。そのトークイベントの概要を掲載いたします。

未来館  
+20  
2021.1.18  
おかげさまで20年。  
自分らしくを これからも

### ●東日本大震災から10年以上経過して

**千葉** 東日本大震災を経て10年の間に何があったのか、いまどのような課題があり、これからの進む方向などについて、双葉郡でいち早く帰村宣言をされ、震災当時から村の復興をリードしていらっしゃる川内村の遠藤雄幸村長と、東南アジア、中東、アフリカ等で難民、貧困問題や、岩手県陸前高田市をはじめ東北取材し、記録し続けているフォトジャーナリストの安田菜津紀さんをお招きして、「復興」「自分らしく生きる」を主なテーマとして広い視点で語り合います。どうぞよろしくお願いいたします。

**遠藤** 現在5期目、約18年間、村長を務めております。川内村は、東京ドームの約4,200個分の面積があり、現在の人口は震災当時の約8割、約2,100人です。豊かな森に囲まれて、季節の移り変わりを身近に感じながら、少し時間がゆっくり過ぎるような感じのするとてもすてきな村です。そういう豊かな自然、牧歌的な雰囲気の村に、2011年3月、放射性物質が降り注いでしまいました。

いまは多くの方々のご支援によって、企業誘致も進み、また、ブドウやイチゴやブルーベリー栽培などの新しい産業も根づきつつあります。私自身、この10年間、さまざまな不条理やあつれき、ジレンマと闘ってきました。課題解決のためにエネルギーを費やすことは大変でしたが、かなりエキサイティングでポジティブな時間でもありました。復興は、ひと

言でいうならば、生きがいやプライドをどう取り戻していくことだと思います。

**安田** 私は、神奈川県横須賀市の出身です。東日本大震災当日は国内にいませんでした。そんな自分が東北のことや震災のことを語っていいのだろうかと考えてしまうこともあり。取材を続けてもう11年近くになります。東北で出会った方々から、その葛藤やある種の後ろめたさも含めて向き合っていくことだと教わった気がしています。

東北での取材を続けるきっかけについてお話しします。岩手県陸前高田市の『奇跡の一本松』の写真をご覧になったことがあると思います。ここは高田松原と呼ばれる日本百景に数えられていたところで、何万本もの松林がありました。津波で1本だけ耐え抜いたのがこの松でした。陸前高田市は、震災前の人口が2万人強で、亡くなられた方、行方不明の方が合わせて2,000人近くいらっしゃいます。このまちに義父母が暮らしていました。義父は県立高田病院の副院長を務め、病院の4階部分で首まで水につかっていたのですが、翌3月12日に病院屋上からヘリコプターで救助され、なんとか一命を取り留めました。しかし、義母は約1か月後の4月9日、一本松の横にある気仙川の9キロ上流で瓦礫の下から、犬の散歩ひもをギュッと握りしめた状態の遺体で見つかりました。

私は写真で伝えるという仕事を続けてきましたが、何枚シャッターを切っても瓦礫をど

けられないし、避難所の人たちの空腹も満たせない。写真を撮ることを躊躇してしまう期間が続きました。震災後3~4年経った頃、陸前高田でずっとお世話になってきた方にそのことを打ち明けたところ、「あの直後こそ、自分は写真を撮っておいてほしかったと思ってる。あのとき自分も遺体の捜索に加わっていて、カメラで写真を撮ろうとしている人間がいたら、『おい、なに撮ってるんだ!』と怒鳴っていたかもしれない。だけど、『この町はどこまでガレキがあった?自分たちはどうやってあの中で生き抜いてきた?』と、時間が経つほど記憶が曖昧になっていく。だから、写真を残しておいてほしかったんだ。」とおっしゃいました。それで「いま起きていることを、いま伝える」ために、その教訓を次の世代に未来に手紙をつづるような思いで手渡していく、そのような記録の残し方もできるのではないかと思うようになりました。

### ●10年経つての変化

**千葉** 震災から10年以上が経ち、変化したことや、それについてどのように感じておられるかお聞きしたいです。

**遠藤** 安田さんのお話を聞いて、やはり写真はとても説得力があるなと感じました。当時は目の前のことで忙しく、記録することがなござりになっていました。あのときに写真を撮っておけばよかったなと、いまつくづく思います。

川内村は、2012年1月に帰村宣言をしました。それによる変化は、ポジティブな部分とネガティブな部分があります。ポジティブな変化は、企業誘致が進み、働く場所の選択肢も増えたこと、昨年4月に義務教育学校として新しい学校が立ち上がり、0歳から15歳まで一貫して子育てや教育ができる環境が整いました。学校内に、住民が自由に出入りできるコミュニティスペースがあります。伝統芸能のようなワークショップを開いて、子どもたちと

地域の人たちの交流の場にもなっています。

一方で、ネガティブな面、とても寂しく残念なこともあります。補償や賠償というお金が絡んだり、地域によって分断されたりして住民感情も複雑になり、あつれきも生じました。まだ2割の方々が避難をしている状況があります。避難している約6割が子どもたちや若い人たちの世帯です。若い人たちに戻ってきてもらうためにはどうしたらいいのか、川内村に住所はあっても村の学校で学んだことがない子どもたちに村のアイデンティティをどう伝えていったらいいのかの問題もあります。

復興を進める中で、確かにお金や制度は大事です。しかし、村民の生きがいや誇りを取り戻すためには、やはり自立していく、自分自身で一歩踏み出していくことが大切だと思います。

**安田** 陸前高田では、津波被害のあった地域のかさ上げに大規模な予算を使いましたが、いまだにかさ上げ地の半分以上が用途未定です。震災後、皆さん必死にまちづくりをしてきました。必死だったからこそ、意思決定で問題はなかったか、ボタンの掛け違いはなかったかなど丁寧な検証もまた必要になってくると思います。

そして、最後に問われてくるのが、心の復興のあり方かだと思います。一本松は、何か力を与えてくれる希望の象徴に見えて、夢中でシャッターを切って、新聞に掲載され、タイトルに「希望の松」と付けられました。それを真っ先に義父に見せたところ「あなたのように震災前の7万本と一緒に暮らしてこなかった人にとっては希望の象徴に見えるかもしれないけれども、自分たちにとっては『あの7万本が1本しか残らなかった』という津波の威力の象徴みたいに見えるし、僕はできれば見たくなかった。」と言われました。まちの人にもこれを希望だと思って心の支えにした方々もいたと思います。「希望」「前向き」という言葉はとても大事で尊いものである一方、それが時に強く響きすぎてしまい、「自分は頑張れて

いない」「前向きになれていない」と自分を責めてしまう方もいると思います。

被災地の復興の度合いがそれぞれ違うように、心の復興の歩みも違いますよね。心の復興の歩幅はそれぞれ違うことを前提にしながら、私たちとしては伝える仕事を続けていく必要があると感じます。置き去りにされがちな声や、なかなか自分の言葉でうまく伝えられない方の声に耳を傾けることに軸足を置いて伝えられないか、11年経ったいまだからこそ思います。今日のトークのテーマにもつながっていると思います。

**千葉** 私も10年ほど経ってようやく語れるようになったと被災者の方から聞きました。それぐらい時間が必要だということだろうと思います。

**遠藤** 安田さんの「軸足をどこに置くか」が心に響きました。行政がどの立ち位置で、避難している、あるいは、戻ってきている人たちへのサポートをしていくかを考えていきたいと思います。

## ●これからの被災地について

### 課題と思われること

**千葉** 被災地の課題についてはいかがでしょうか。

**遠藤** 村の人たちもこの10年、行政依存度が震災前から比べると高まってきたと言いますか、自分で判断することを少し避ける、あるいは誰かに判断してもらうことが多くなっていると感じます。

双葉郡全体の総人口はまだ2万人少しで、震災時の3分の1程度です。時間が経つほどふるさとに戻らない選択肢は増えると思います。特に、原発立地地域の双葉町や大熊町は、処理水タンクの問題や中間貯蔵施設の今後のあり方とか、特に大きな課題を抱えています。フェーズが変わるたびに分断と対立が繰り返されてきたのが福島だと思っています。福島がどのような立ち位置になるのか、日本の未来を占う試金石だとも思います。

**安田** 大熊町でも取材を続けていまして、町の沿岸部の帰還困難区域での捜索活動をした木村紀夫さんと具志堅隆松さんのことについてお話します。

木村さんはお父さんと妻を津波で亡くされ、当時小学校1年生の次女の汐凧さんは行方不明のままです。帰還困難地区となったため、わずかな帰還が許される日に、木村さんは手作業で捜索を続けてきましたが、汐凧さんの捜索は進みませんでした。ようやく約5年前の2016年11月に、環境省に依頼して、重機を入れての捜索が始まりました。そして翌年12月に、泥まみれの子どものマフラーとそれに絡まっていた子どもの顎の骨の一部が見つかり、DNA鑑定の結果、汐凧さんだとわかりました。木村さんは、見つかった喜びの気持ちの一方で、なぜ娘を6年近くの間、瓦礫の中に閉じ込めなければならなかったのだろうか、心境は非常に複雑だとおっしゃっていました。木村さんは、震災直後にこの周辺を捜索した地元の消防団の方から、何か助けを呼ぶような男性の声を聞いた話を聞き、そして、木村さんのお父さんのご遺体はこの付近で見つかりました。もしかしたら、その声はやはりお父さんで汐凧さんもまだ息があったのではないか。そして、汐凧さんの大部分の遺骨はまだ見つかりませんでした。

そこへ、さまざまなお縁があって、沖縄県で戦没者の遺骨収集を40年近く続けてこられた具志堅隆松さんに、汐凧さんの遺骨捜索のために福島に来ていただけることになりました。今年の元日から捜索活動で、首の骨が見つかったところから数メートル離れたやぶの中を具志堅さんと木村さんが地表を掘り始めてからわずか約20分、小さな子どもの骨と思われる大腿骨が出てきたのです。まだDNA鑑定の結果は出ていませんが、汐凧さんである可能性は高いと思われます。具志堅さんは「父と娘が呼び合う力だね。」「祈りが精神的な慰霊だとすれば、見つからない方の

遺骨の捜索は行動で示す慰霊なのかもしれない。見つかった骨は『人』なんです。」とおっしゃっていました。

## ●困難な状況から

### “自分らしく”生きるために

**千葉** イベントのテーマである「自分らしく生きるために」について伺いたいのですが、まずセンターのことをお話します。性別にとらわれず、自分らしく生きる社会づくりや人権についての取組みを20年間ずっと進めてきました。そうして11年前に震災が起き、最大2,000人以上、県内最大の避難所となったビッグパレットふくしまで、性暴力やDVなど女性たちの生活不安の声を聞いていた福島県の支援チームからの要請があり、女性たちが安心して過ごせる居場所「女性専用スペース」の設置と運営協力を、地元の女性団体の皆さんたちと連携・協働して行いました。

「女性専用スペース」では、そこに避難している方々の深い心の傷をいやしたり、さまざまな悩みを共有するスペースとなるよう心掛けたのですが、これは、「自分らしく生きる」一つのあり様を模索した取組みと言えると思います。

また、別のところでは、仮設住宅に住みながら管理人となって高齢者の方々に寄り添い、いろいろな声を聞き取り、仮設住宅の運営を避難者の心の支えや生きがいづくりに奔走した女性が大変活躍されました。ほかにも、震災以前から阿武隈高地の農家の女性たちが直売場に野菜を出したり加工販売しており、自らが被災者なのですが、被災者を支援しようと立ち上がり阿武隈の食文化を伝える活動などをされました。

このような女性たちと連携して事業を実施しながら、福島での取組みを県内外に発信してきました。いまなお「災害と復興」はセンターの大きなテーマです。

**遠藤** 自分らしくというところでは、「曖昧な

喪失感」があると思います。特に、村を離れて避難している人たちは、自分の家でありながら家の中で生活ができない。自分の田んぼや畑でもそこでお米や野菜を作ることができない。そういう喪失感を抱いていると思います。

その喪失感を埋めるためには、一足先に戻った私たちがきちんといつ帰ってきてもいいように迎えるためのふるさとを整備しておくということが必要ではないかと思います。ふるさとはかけがえのないものです。いま、村に戻らない選択をしている人たちも、生まれ育ったふるさとが消滅していいかということ、そうではないと思います。戻ろうという選択肢が出たときに村が存在し続けることは、避難をしている人たちに勇気を与えます。村民が自分らしく生きる、その一助ができればいいなと思います。

**安田** 被災した教訓やさまざまな英知の蓄積による関係性や創造力は、時に国境や国籍を超える力にもなると思います。

私は、いまでも戦争が続いているシリアの支援活動にも携わっています。反政府デモが起きて、シリア政府が武力で応じて戦争が始まったのも2011年3月で、東日本大震災と同じく11年の月日を経ています。シリアはかなり緯度が高く、冬になると一気に気温が下がります。戦禍を逃れて隣国に逃げた子どもたちが凍死してしまった話を陸前高田の仮設住宅の方々にしたとき、特に女性たちが中心になって、子どもたちや孫たちが大きくなって使わなくなった服を、シリアの子どもたちのために段ボール10箱分以上集めてくださったことがありました。皆さんご存じのとおり、古着の支援はマッチングが難しいのですが、ご自身の避難経験から、どのようにすれば受け取りやすいのかを知っているのも、とても丁寧に梱包していただき、現地のNGOを通して一家庭一家庭に届けることができました。

中心になってくださった一人で、80歳を超えているおばあちゃんが、「1945年の第二次

世界大戦、1960年のチリ地震津波、今回と避難生活は3回目だけど、それでも私たちは国自体を追い出されるまでではなかった。だから、寒い中、異国で避難生活を送っているあの子どもの方がきっと大変な思いをしているんだ。」とおっしゃいました。自身が大変な目に遭いながらも進んで役割を担われ、顔がいきいきしていらっやったことがとても印象に残っています。自分で行動を選び取り、できる範囲の役割を少しずつ持ち寄っていく。自己決定をしていく、自分らしく生きるということの一つのヒントを、仮設住宅の方々から教えていただいたと思っています。

### ●“男女共同参画”視点での復興・まちづくり

**千葉** 自立の後押しはとても重要な視点だと思います。自分自身で決定して、自分の足で動く、そういう思いを持つ人たちと一緒に手をつないでいくことが大事です。お二人に男女共同参画の視点での復興、まちづくりについて伺います。

**遠藤** 自分以外の人や場所で、自分がやれることをどうやっていくか、これは人間の尊厳に値するものと思います。大切な場所があって守りたい人がいる、これに勝るものはないです。

帰村宣言の前、一時立ち入りができるようになったときに、村の婦人会の方が立ち寄り所を立ち上げてお茶をふるまったり、それぞれの境遇を話されたりとサロンのような場所を自主的にされてきました。

村には、詩人の草野心平が好きだった、半世紀以上続けている「天山祭り」があります。避難して今年は無理かなと思っていたら、婦人会の方が村に戻って、規模を小さく、集まれる人だけで進めてくれました。いのちの森づくりの植栽事業をしてくださったのも婦人会の人たちです。復興のイニシアチブをとっているのは女性だと実感しています。

**千葉** 川内村は移住支援やひとり親世帯の支援にも力を入れているとお聞きしています。

**遠藤** 移住したひとり親の世帯の人たちに経済的な支援をしています。現在、14～15組・30数人が、川内村に来ていただいて、子どもたちは新しい学校の中で学んでいます。

お金や制度は大切ですが、お子さんが熱を出した、お母さんの体調が悪いなどのときに、近くの人たちのサポートが得られればいいですが、顔なじみがいないところではお願いしづらいと思います。そのために、子育て活動支援を立ち上げようと準備をしています。地域の人たちに登録していただいて、お子さんを預かる取組みです。

**安田** 女性たちの力がコミュニティで十分に発揮されるためには、安心や安全が確保されてこそだと思います。ビッグパレットでニーズに気づいて女性専用の空間をつくったのはとても重要な取組みだったと思います。その一方で、なかなか女性たちの声が反映されずに、ニーズが置き去りされた避難所もあったことを、東北地域取材する中で耳にしました。震災直後に性暴力の被害に遭ってしまったことを、最近になって10年来の知り合いの方から打ち明けられたことが相次いでありました。いまだからこそ話せたことの一つだと思います。

また、フィリピンや中国人女性と日本人男性のパートナーなどのご家族もたくさんいらっやいます。日本人男性のパートナーが津波で亡くなったり行方不明になってしまうと、日本語が十分に話せず情報収集にとっても苦労した話も聞きました。誰も取り残さずに支援することは、自分らしい生活を立て直す第一歩だと思います。

**千葉** 最後に、ひと言ずつお願いしたいと思います。

**安田** 時間が経つほど報道の量が少なくなりますので、報道の質が問われます。過度に美談にしたり、逆に過度に悲惨さを強調したりするのではなく、遠藤さんがおっしゃったように、一筋縄ではいかない細かいことがたく

さんあります。その細かなことに実はこれからの未来を考える本質があると今日のお話を通して思ったところです。

被災地に通っている者として、自分に何ができるだろうかと考えたときに、やはり日頃から心を寄せ続けることを心がけたいと思います。例えば、私は日本酒が好きなので、必ず東北産の銘柄を飲むようにしたり、または川内産のワインにしたりして、日常で東北のことを思い、心を通わせて、つながり合う機会をこれからつくっていきたくと思います。また、引き続き取材発信ができればと思います。

**遠藤** 3月には川内村産のシャルドネをリリースできます。ぜひテイスティングしてください。

情報の発信の仕方については考えさせられますね。これまで、いろいろな情報に翻弄されてきましたし、真実かどうかわからない状況で避難をしてきましたので、3つあります。1つ目は、最終的には自分自身で情報リテラシーを身につけていくしかないこと、2つ目は、想像してみることで。あの日まで原子力発電所は事故を起こさないと信じていました。想像することが足りなかった。想像して備えていけば、川内村は100人が関連死されたのですが、少なくできたのではないかと考えています。

3つ目は、どのような状況になっても希望を捨てないということでしょうか。苦しいことはいっぱいありますけれども、その中でもやはり希望を捨ててはいけなと感じます。

川内村は都会のような便利さや、文化的な施設もありません。しかし、穏やかに生まれて、穏やかに生活して、穏やかに年を重ねていく、そんな村だったらいいなと私自身も思っています。このトークイベントをお聞きになっている方で川内村に興味を持たれた方は、「かわうちの湯」も「いわなの郷」やおいしいおそばもありますのでぜひお越しください。

**千葉** 今日は短い時間でしかたけれども、たく

さんの何かヒントをいただいたように思います。福島県内、あるいは県外に避難していらっやる方の声を聞き、センターから発信していく必要を改めて思いました。

県内外の皆さんからのご支援をいただきながら、センターとともに自分らしく生きることのできる社会を、一緒につくっていきたくと思っています。どうぞこれからもお力を貸していただきたくと思います。本日はどうもありがとうございました。

### talk event ゲストプロフィール

#### 遠藤 雄幸さん

川内村村長 福島大学教育学部卒。平成11年4月～平成12年4月川内村議会議員を経て、平成16年4月25日から現職。現在5期目。ほかに一般財団法人ふくしま市町村支援機構理事長、福島県水源林造林推進協議会長、社会福祉法人川内村社会福祉協議会長、川内村体育協会会長、主要地方道小野富岡線改良整備促進期成同盟会長、公益社団法人福島県森林・林業・緑化協合理事、福島県土地改良事業団体連合会副会長の要職を務めている。



#### 安田 菜津紀さん

認定NPO法人Dialogue for People 副代表。フォトジャーナリスト。東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。



#### 千葉 悦子

福島県男女共生センター館長。北海道大学院教育学研究科博士課程修了。福島大学行政社会学部講師、同教授、行政政策学類教授、同学類長、福島大学副学長を経て、福島大学名誉教授。現在は放送大学福島学習センター所長。専門分野はジェンダー学習論、地域づくり教育論、農林家族論。平成22年4月から現職。



今回は、令和3年度に内閣府男女共同参画局が実施した「性別による無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)に関する調査研究」について紹介します。

「アンコンシャス・バイアス」とは、自分自身が気づいていない「ものの見方やとらえ方のゆがみや偏り」をいいます。自分では意識しづらく、ゆがみや偏りがあることは認識しづらいため、「無意識の偏見」と呼ばれています。

過去の経験や周囲の意見、日常的に接する情報から形成されるもので、誰もがもっているものです。気づかないうちに、決めつけたり押し付けたりしているかもしれません。

アンコンシャス・バイアスに気づくことで、相手と良い関係を築く第一歩としましょう。

### 調査概要

令和3年度「性別による無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)に関する調査研究」

- ・目的: アンコンシャス・バイアスについて、気づきの機会を提供し、理解を促すことでその解決を図る。
- ・対象者: 全国男女20代～60代
- ・調査手法: インターネットモニターに対するインターネット調査
- ・回答数: 10,330人(男性:5,069人(49.1%)、女性:5,165人(50.0%)、その他:96人(0.9%))
- 注意点: 性別「その他」を選択した回答者数は96人(全体の0.9%)であり、全体の集計結果には、性別「その他」の回答者も含む。本調査では、男性と女性の意識や経験について分析することを目的としているため、図表等では、「その他」の回答者の表示は、省略している。

この調査は、家庭・コミュニティ領域(16項目)と職場領域(15項目)での性別役割、その他(5項目)性別に基づく思い込みの36項目について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階について自分の考えにあてはまるかどうかについて調査を行った。

以下は、家庭・コミュニティ領域、職場領域ごとに「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した合計を男女別で上位5項目を表にしたものである。

それぞれの項目について「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した場合、性別役割意識が強い傾向にあると考えられるとしている。

家庭・コミュニティ領域では、男女共に上位5位に仕事と家事の分担に関する項目「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」「共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先すべきだ」「家事・育児は女性がするべきだ」が入っていた(色付き部分)。また、3項目とも女性より男性の「そう思う」の回答が多く、男性の方が仕事と家事の分担に関して、性別役割意識が強いようだ。

職場領域では、男女共に「育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない」が最も多かった(下線色付き部分)。家庭・コミュニティ領域で仕事と家事の分担に関する項目が多かったように、男性は仕事、女性は家庭という性別的役割分担意識が根強く残り、女性は仕事を持って家庭を優先すべきだという考え方が男女共にあるようだ。

### 家庭・コミュニティ領域

男性	上位5項目	(%)
1	男性は仕事をして家計を支えるべきだ	50.3
2	デートや食事のお金は男性が負担すべきだ	37.3
3	男性は結婚して家庭をもって一人前だ	30.3
4	共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先すべきだ	29.8
5	家事・育児は女性がするべきだ	29.5

女性	上位5項目	(%)
1	男性は仕事をして家計を支えるべきだ	47.1
2	共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先すべきだ	23.8
3	共働きで子どもの具合が悪くなった時、母親が看病するべきだ	23.2
4	家事・育児は女性がするべきだ	22.9
5	デートや食事のお金は男子が負担すべきだ	22.1

### 職場領域

男性	上位5項目	(%)
1	育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない	31.8
2	組織のリーダーは男性の方が向いている	25.7
3	受付、接客・応対(お茶だしなど)は女性の仕事だ	25.1
4	大きな商談や大事な交渉事は男性がやる方がいい	23.5
5	職場での上司・同僚のお茶くみは女性がする方がいい	22.2

女性	上位5項目	(%)
1	育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない	30.7
2	組織のリーダーは男性の方が向いている	22.4
2	大きな商談や大事な交渉事は男性がやる方がいい	22.4
4	受付、接客・応対(お茶だしなど)は女性の仕事だ	20.1
5	職場での上司・同僚のお茶くみは女性がする方がいい	16.9

※令和3年度性別による無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)に関する調査研究(内閣府男女共同参画局)より作成

性別に基づく役割や思い込みを決めつけられた経験において、「直接言われたり聞いたりしたことがある」「直接ではないが言動や態度からそのように感じたことがある」について、男女別で上位5項目を表にした。

性別に基づく役割や思い込みを決めつけられた経験は、「直接言われた経験」よりも「言動や態度から感じた経験」の方が多い。また、男性より女性の方が、性別に基づく役割や思い込みを決めつけられた経験があると回答した割合が高い。

直接言われたり聞いたりしたことがある

男性	上位5項目	(%)
1	男性は結婚して家庭をもって一人前だ	14.2
2	男性は仕事をして家計を支えるべきだ	13.6
3	デートや食事のお金は男性が負担すべきだ	13.1
4	男性は人前で泣くべきではない	12.5
5	女性には女性らしい感性があるものだ	11.5

女性	上位5項目	(%)
1	女性は感情的になりやすい	19.9
2	女性には女性らしい感性があるものだ	17.2
3	家事・育児は女性がするべきだ	16.9
4	男性は仕事をして家計を支えるべきだ	16.3
5	受付、接客・応対(お茶だしなど)は女性の仕事だ	15.7

直接ではないが言動や態度からそのように感じたことがある

男性	上位5項目	(%)
1	家事・育児は女性がするべきだ	22.5
2	男性は仕事をして家計を支えるべきだ	21.3
3	デートや食事のお金は男性が負担すべきだ	20.5
4	男性は結婚して家庭をもって一人前だ	20.2
5	受付、接客・応対(お茶だしなど)は女性の仕事だ	19.6

女性	上位5項目	(%)
1	家事・育児は女性がするべきだ	31.8
2	受付、接客・応対(お茶だしなど)は女性の仕事だ	26.7
3	男性は仕事をして家計を支えるべきだ	26.2
4	親戚や地域の会合で食事の準備や配膳をするのは女性の役割だ	26.0
5	共働きで子どもの具合が悪くなった時、母親が看病するべきだ	25.8

※令和3年度性別による無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)に関する調査研究(内閣府男女共同参画局)より作成

性別に基づく役割や思い込みを決めつけられた経験

この調査の自由回答の一部を紹介します。皆さんも同じような経験ありませんか？

《家庭の中で…》

出産をしたのですが、家事育児は女性がやるものだと、旦那と義母から言われました。復職を考えているのですが、女は家を守れと言われ、まだ、できていません。  
(女性 20代)

洗濯物の出し入れをしている時に母親からあなたそんな事しているのかとみっともないと言われた。  
(男性 60代)

子どもを病院に連れて行ったら、病院の待合室で看護師さんにお母さんは今日来ていませんか?と聞かれたことがある。  
(男性 30代)

町内会の会長、副会長など決める際、男性であるべきだと男性からも女性からも発言があった。男性の方が威厳があるからだという理由だった。時代にずれていると思った。  
(女性 60代)

義理の父が入院したときに、私も仕事をしているのに「身の回りの世話は女性がやるべきだ」と配偶者に言われた。  
(女性 40代)

《職場でも…》

会社の社長に来客があった時、普段お茶を出している総務部の女性がたまたま休みで、総務部長が『男がお客さんにお茶を出すのはみっともないし、向こうも気分良くないだろうから女性がお茶を出して』とまったく別部署の女性にお茶出しを要請に来た。  
(女性 50代)

上司から休日出勤やサービス残業は、男なら当たり前だと言われたことがある。  
(男性 40代)

女性視点での企画を考えて欲しいと言われると困る。  
(女性 30代)

営業の数字が採れず、同期の女性に数字が負けていた際に、上司から「男なら女より数字を採れ。負けて恥ずかしくないのか。」と叱責された。  
(男性 20代)

女性だから結婚妊娠の可能性があり、仕事に有利な研修会を受けさせてもらえなかった。  
(女性 20代)

この調査の詳細は、内閣府男女共同参画局のホームページに掲載されており、無意識の思い込み事例集やチェックシートなどもあります。

無意識の思い込みに気づけるチャンスです。ぜひ、ご覧ください。

参考

令和3年度 性別による無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)に関する調査研究(内閣府男女共同参画局) [https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/seibetsu\\_r03.html](https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/seibetsu_r03.html)



センター図書室の

特集1「福島県男女共生センター開館20周年記念イベント」

特集2「アンコンシャス・バイアス」に関する **オススメ本**

BOOKS

## 『故郷の味は海をこえて 「難民」として日本に生きる』

安田菜津紀/著 ポプラ社 2019年▷

日本で難民認定を受け生活を送るには、厳しい審査を通過しなくてはなりません。加えて、他国と比較すると日本はその認定率が著しく低く、不安定な生活を送っている人たちが存在しています。この本では、危険から身を守るために、やむを得ず故郷を離れて日本で暮らす人びとを紹介しています。写真からも伝わるあたたかな料理と共に、それぞれの大切な故郷の思い出にふれてみませんか。



## 『「男女格差後進国」の衝撃 無意識のジェンダー・バイアスを克服する』

治部れんげ/著 小学館 2020年▷

日常生活に根強く染みついている性別に基づく決めつけ(ジェンダー・バイアス)は、男女共同参画社会の実現の妨げになっています。日本で女性管理職の割合は、過去30年を振り返ると上昇していますが、世界各国ではそれ以上の速さで女性管理職の割合が増加しているのが現状です。ジェンダー問題を専門的に研究している著者が、国内外の様々な場面で行われてきた取組みを紹介し、次世代のためにも、身の回りのジェンダー問題について考えてみましょう。



問い合わせ 福島県男女共生センター図書室 ☎0243-23-8308

開館時間 9時~20時 (休館日前日は17時、休館日は月曜日)



コラム column

## 「後世に残したくない言葉」

### 【寿退社】

ことぶき・たいしゅ

ある塾講師が投稿した「高校生に寿退社の意味を訪ねたところ、ある生徒が『定年まで勤め上げてめでたく退職すること。』と回答した」という話が「Twitter」で話題になりました。

寿退社とは、女性が結婚して仕事を辞めること。

今では信じられませんが、昭和の時代には女性が就職する際に「結婚または満35歳に達したときは退職する」という条件で採用していた会社もあったそうで、女性は結婚後も同じ仕事を続けるという選択は難しかった時代でした。

### 【永久就職】

えいきゅうしゅうしよく

女性が結婚をして家に入ることを会社に就職することになぞらえて、このように言われていました。

今は、夫婦共働きが増え、離婚率も上がっていること、基本的に男性には使わなかったことから、当時の結婚・離婚観も伺える言葉です。

どちらの言葉も女性の生き方を狭めていた言葉でした。今、聞かなくなったということは、時代の変化とともに女性の生き方に選択肢が増えたのかもしれませんが、今後、逆行しないようにと願うばかりです。

福島県  
コロナ過における

## 女性のつながりサポート事業支援団体紹介

上記事業において、本年度は、6団体が県内各地で相談や居場所づくり、生理用品の配布などを実施しています。

今回は、その団体の中から「特定非営利活動法人あさがお」と「特定非営利活動法人 Commune with 助産師」の団体の活動について紹介します。

### 特定非営利活動法人 あさがお

理事長 西みよ子さん

南相馬市鹿島区鹿島上沼田120-1 電話:0244-46-2527 HP: <http://www8.plala.or.jp/asagao/>

障がいがあっても、人として生きる権利があるため、社会復帰・社会参加に関する事業を行い、人間らしく生きる権利の確保に寄与することを理念とし、平成14年6月より事業を開始し、今年で20年精一杯支援を行ってまいりました。

東日本大震災で精神科病院が閉鎖されるなか、活動支援センター「あさがお」を開設し、その後も共同生活援助事業所「いやしの家」や就労援助支援B型事業所「きぼうのあさがお」、多機能事業所「ともに」、児童発達支援・放課後等デイサービス事業所「はぐくみ・あさがお」等、必要な支援を確保するため精一杯の活動を展開しています。

「働くことを生活の柱に」の合言葉のもと、地域にも家族にも一生懸命に働き自立していく姿を見てもらいながら、この地方の特産物である青肌豆(あおばたまめ)という濃厚でお祝い事などでいただくご馳走豆を、農薬を使わずに栽培・収穫し、加工品として販売してきました。

障がいがあっても、必要な支援があれば、自分らしく自立して生活していくことは可能だと考えております。私たちは平成14年以降、日中の居場所、就労の支援、高齢者支援、児童の支援と、支援の幅を広げて参りました。私たちは、これからも必要な支援をお届けしたいと願っております。



活動の様子「青肌豆選別作業」

### 特定非営利活動法人Commune with 助産師 (通称:NPO Commune(こみゅーん))

理事長 草野祐香利さん

いわき市平谷川瀬2丁目11-12 電話:0246-23-3303 HP: <https://cw-jyosanshi.com/>

「相談できる助産師はどこにいるの?」「早く教えてほしかった!」…、産後早期の母親たちの悲鳴にも似た声に突き動かされ、2006年9月に助産師有志の任意団体『こみゅーん』として始動しました。当時、出産可能な産科医療施設が減少し、家族や地域の状況からも産前産後のケアやサポートは非常に手薄でした。

当団体は、「Communication (信頼のある人間関係)を大切にする妊娠・出産・赤ちゃん育児の専門家である助産師が、Community (地域・ここ)にいます。」と、今も発信し続けています。2009年にNPO法人となり、2010年8月に妊産婦ケアを行う有床助産所をもつ現事業所を開設しました。その7か月後に3.11東日本大震災・原発事故が起こり、被災支援とともに市内の子育て支援ネットワーク「こども♡あいネット」を構築し、以来、防災・多世代交流・次世代育成・女性活躍推進にも取り組んできました。

活動の柱は4つあり、妊産婦ケア・性の健康支援を行う「こみゅーん助産院」を核に、親子が学び遊びくつろげる交流ひろば「こみゅーんクラブ」、妊婦・乳幼児家庭へ訪問し傾聴・協働を行う子育て支援「ホームスタートこみゅーん」、いわき地域の子ども子育てサポーター情報検索サイト「いわさぽ」を運営しています。

助産師を中心としたNPOメンバーやボランティアの方々、地域の方々と共に、子どもや女性が孤立することのない子育ての社会化、平等・平和、自己実現につながる、皆が笑顔で生涯元気にいきいきと優しく暮らせる共生協創社会に寄与したいと奮闘中です。



活動の様子「妊産婦サロン・相談」

【福島県コロナ過における女性のつながりサポート事業に関する問合せ】  
福島県男女共生センター事業課 電話:0243-23-8304



## あなたの市町村の 男女共同参画の取り組み紹介

県では令和3年度に「ふくしま男女共同参画プラン」を改訂し、男女共同参画社会推進に向けた取り組みを実施していくこととしています。

そこで、県内59各市町村が、男女共同参画の推進に関するどのような取り組みを行っているのか、ご紹介いただきたいと思えます。

今回紹介するは、相馬市と南会津町です。



### 相馬市 ご紹介くださった方:相馬市教育委員会

～家庭の在り方を考える～おうち時間写真展 開催～

新型コロナウイルスの影響による外出自粛やテレワークの推進などにより、家族がともに家で過ごす時間が増えたという方も多いのではないのでしょうか。

コロナ禍でのDV(ドメスティック・バイオレンス)の増加等が社会問題となっておりますが、家で過ごす時間が増えたことは、家庭の在り方を改めて見つめなおす機会でもあります。

そこで、相馬市男女共同参画推進会議では、性別にとらわれない育児参加やワークライフバランスの実現など、男女共同参画の意義について理解を広めることを目的として「おうち時間写真展」を開催しました。

「おうち時間 みんなで協力 家事・育児」をテーマとして、令和3年7月9日から8月6日にかけて作品を募集したところ、18作品の応募があり、8月13日から8月31日にかけて、相馬市役所1階ロビーに作品を展示しました。

おうち時間の楽しい過ごし方や、積極的に育児をする若いお父さん、おばあさんとお孫さんが協力する家事風景など、様々な作品が展示され、ご覧いただいた多くの市民の方々にとっても、家庭の在り方を考える有意義な写真展となりました。



応募作品「はじめてのなつやすみ」

### 南会津町 ご紹介くださった方:南会津町教育委員会 副主査 酒井来武さん

南会津町は、令和4年3月に「からふるプラン(南会津町男女共同参画計画)」を策定し、令和4年度から男女共同参画推進事業をスタートさせました。

プランの名称は、親しみやすさと多様な個性を認め合う社会を表現しており、各種事業も「分かりやすさ、親しみやすさ」を意識して取り組んでいます。

5月には、家庭・職場・地域・教育の様々な場面で、町民一人ひとりが男女共同参画の推進に向けて行動してもらうため、プランの「実践版」を発行しました。

また、町広報紙6月号の特集を皮切りに、今年度は町広報紙に毎号、男女共同参画コーナーを設けて意識啓発に取り組めます。

6月18日には、プランのキックオフイベントとして、男女共同参画講演会「『男だから、女だから』というモヤモヤ そろそろすっきりさせませんか?」を開催しました。

男女共生センターの講師派遣事業を活用し、講師には、各地で男女共同参画に関する研修や講演会を行っている星野雅子さんをお招きし、身近な視点から男女共同参画について解説していただきました。

今後は、親子対象の子育てや男性向けの家事等を学ぶ公民館講座を実施するなど、様々な事業に男女共同参画の視点を加えていきます。



「からふるプラン」の実践版パンフレット

寄稿

## 「福島から考える多様な性」

### 第1回 LGBTからSOGIへ

福島大学 准教授 前川直哉

テレビや新聞でも、LGBTという言葉を目にする機会が増えました。レズビアン(女性同性愛)、ゲイ(男性同性愛)、バイセクシュアル(両性愛)、トランスジェンダー(出生時に割り当てられた性別と異なる性別を生きる人びと)の頭文字をとったものです。LGBTの語で、これらに当てはまらない人びとも含めた、性的マイノリティ全般を表すこともあります。

私が普段、大学などでジェンダーについて教えるとき、学生たちにこんな質問をしています。「同性愛者のことをレズビアンやゲイと言いますが、では異性愛のことは何と呼びますか?」「トランスジェンダーではない、出生時に割り当てられた性別と同じ性別で生きる人びとを何と呼びますか?」

正解はそれぞれ「ヘテロセクシュアル」「シスジェンダー」です。授業で尋ねると、LGBTという言葉は知っていても、こちらの正答率はぐっと下がってしまいます。性的マイノリティを指す言葉は知っているのに、マジョリティ側を指す言葉は知らないという人が、まだまだ多いのです。

これらの言葉を知らない、性的マジョリティの人が自身の性のあり方を表現するとき、「私のセクシュアリティは、普通です」「ノーマルです」といった言葉を使ってしまうがちです。しかしこれらの表現は、マジョリティでない性のあり方がまるで「普通ではない」「アブノーマル」なもののように聞こえてしまいかねない点で、適切ではありません。

世界的には「LGBT」などの語に代わり、性的指向(sexual orientation、恋愛や性愛の対象となる性)と性自認(gender identity、自己の性別についての認識)を表す「SOGI(ソジ)」の語が使われることが多くなってきました。マジョリティもマイノリティも、性的指向と性自認が何らかの状態であり、そのあり方が違うだけで人権が与えられたり制限されたりするのはおかしい、という発想です。性的マジョリティの人が、「私は普通です」ではなく「ヘテロセクシュアルのシスジェンダーです」ときちんと言乗れるようになることが、性的マイノリティへの差別・偏見をなくしていくための大切な一歩だと、私は考えています。

PROFILE



前川直哉さんプロフィール

福島大学教育推進機構高等教育企画室准教授。1977年生まれ。兵庫県尼崎市出身。99年東京大学教育学部卒業。2012年京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(人間・環境学)。灘中学校・高校教諭を経て14年に福島に転居し、一般社団法人「ふくしま学びのネットワーク」を設立して理事・事務局長に。18年4月からは福島大学特任准教授、22年4月から現職。ジェンダー、教育社会学、教育学を研究。



## 表紙イラストの作者紹介 中村亞都子さんのプロフィール

1953年、郡山市生まれ。多摩美術大学大学院美術研究家絵画専攻修了。現在は尚志高等学校をはじめとする教育機関で美術科の講師を務めながら個展等で作品を発表。



〈令和4年度の未来館NEWSの表紙イラストについて〉  
昨年度に引き続き、中村亞都子さんに表紙イラストを描いていただきます。

未来館NEWSを手にとってくださった方が、あたたかい、明るい気持ちになりますように(\*^-^\*)

## センター利用案内

### 研修室・宿泊室

☎0243-23-8301 (代表)

開館時間：9時～21時(休館日前日は、17時)

休館日：月曜日(この日が祝日の場合はその翌日)、年末年始(12/29～1/3)

※その他臨時休館することがあります。

各研修室(25名程度)1,000円～ 宿泊室(1泊1名)4,400円～ (公共無線LAN(Wi-Fi)も利用可能。)

### 相談室

相談無料

秘密厳守

☎0243-23-8320

開室時間：9時～12時・13時～16時 [水曜日] 13時～17時・18時～20時

○一般相談 ○男性相談員による相談(電話のみ)火曜日 17時～20時

○専門相談 ●法律相談 第3水曜日 ●女性のためのカウンセリング 第1・3金曜日 ●女性ための生活設計相談 偶数月の第2土曜日

※専門相談は完全予約制。その他、詳しくは上記☎まで。

### 図書室

☎0243-23-8308

開室時間：9時～20時 [休館日前日] 9時～17時

約4万冊を蔵書。毎月テーマを変え、おすすめの本を紹介。児童書や大型絵本もあります。

### 福祉機器展示室

☎0243-23-8316

開室時間：9時～12時・13時～17時

約600点以上の福祉用具を「見て 触れて 体験できる」県内最大規模の展示室。福祉用具や住宅改修に関するご相談もお受けしています。

## チャレンジ&内職相談

相談無料

秘密厳守

再就職・キャリアアップ・起業等の相談や、内職の斡旋、事業所からの内職求人受付等を行っています。相談は、各相談コーナーにお電話ください。 ※祝日はお休みです。

●二本松相談コーナー(県北、相双地区担当)

☎0243-23-8307

相談日・時間：火～金・9～12時、13～16時

●いわき相談コーナー(いわき地区、双葉郡担当)

☎0246-22-6400

相談日・時間：月～木・9～12時、13～16時

●郡山相談コーナー(県中、県南地区担当)

☎024-927-4030

相談日・時間：月～木・9～12時、13～16時

●会津相談コーナー(会津、南会津地区担当)

☎0242-29-5588

相談日・時間：月～木・9～12時、13～16時

## アンケートにご協力ください。



広報誌「未来館NEWS」では、よりよい紙面づくりのため、アンケートを実施しています。ご意見、ご感想、取り上げてほしいテーマなど、Googleフォームにてお受けしています。

アンケートはこちら→



2022 SUMMER  
VOL.

82

当センターに対するご意見・ご質問等がありましたら、下記までお問い合わせください。

(公財)福島県青少年育成・男女共生推進機構

福島県男女共生センター(女と男の未来館)

〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1

TEL:0243-23-8301(代) FAX:0243-23-8312

<https://www.f-miraikan.or.jp>



公式 Facebook